

Preview

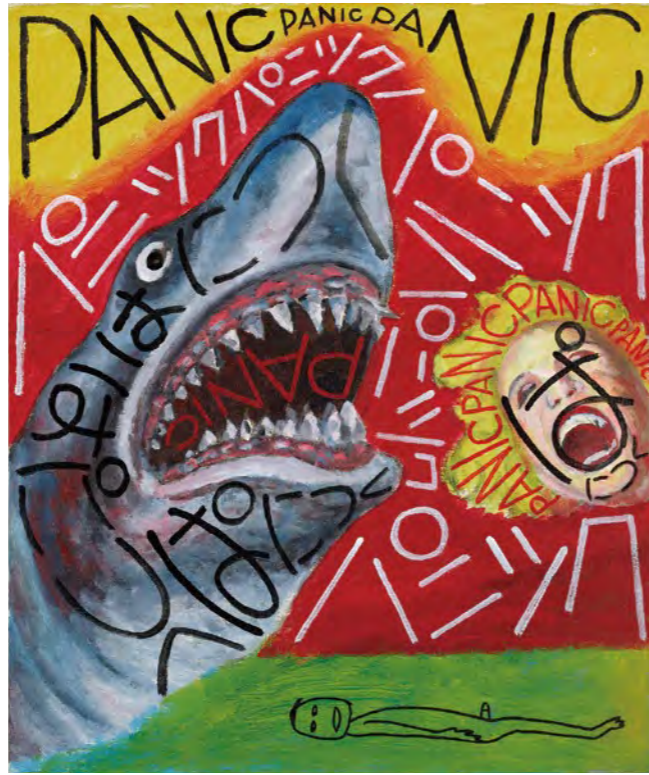
人食いザメと金髪美女 —笑う横尾忠則展

2019年5月25日(土)–8月25日(日)

本来出会うことのない事物が同一画面に共存する謎めいたイメージは、横尾さんの作品の特徴のひとつです。それは「解剖台の上のミシンとコウモリ傘の偶発的な出会い」に似たシュルレアリスムの手法を想起させますが、横尾作品に漂うおかしみには、「偶発的」ではない作為性が感じられます。時には子どもの遊びのような無邪気さで笑いを誘い、時には批評精神あふれるパロディで謎解きを挑む、ヨコオワールドには見る者を挑発する仕掛けが散りばめられているのです。本展では、ユーモアとウィットに着目し、作品に仕掛けられた謎と毒に迫ります。

また、横尾さんが美術を手がけた「スーパー狂言」3部作(作:梅原猛、演出:二世茂山千之丞)の装束や道具を一堂に展示します。時代もジャンルも超えて響きあう、いくつかの出会いが、新たな笑いを導くことでしょう。

平林 恵 | 本館学芸員



横尾忠則《Panic!ばっくパニック》2002-12年 | 作家蔵(横尾忠則現代美術館寄託)



狂言「附子」より

【関連イベント】

狂言と、狂言のお話

おなじみの狂言「附子」の上演と、狂言にまつわるトークの二本立て。

梅原猛・作、二世茂山千之丞・演出で横尾忠則が装束を手がけた、スーパー狂言3部作の裏話も。

日時:7月13日(土)14:00～ 会場:当館オープンスタジオ

出演:茂山七五三、茂山千之丞、鈴木実

参加費:無料 定員:100名(先着順) ※イベント詳細や、その他のイベント情報については当館ホームページをご覧ください

兵庫県立美術館 | 展覧会スケジュール

特別展

印象派からその先へー世界に誇る吉野石膏コレクション

2019年6月1日(土)–7月21日(日)

ICOM京都大会開催記念 山村コレクション展(仮題)

2019年8月3日(土)–9月29日(日)

県美プレミアム

特集 | 境界のむこう

2019年3月16日(土)–6月23日(日)

小企画 | 美術の中のかたち 一手で見る造形 八田豊展(仮題)

特集展示1 | 新収蔵作品展(仮題)

特集展示2 | 没後80年 村上華岳(仮題)

2019年7月6日(土)–11月10日(日)

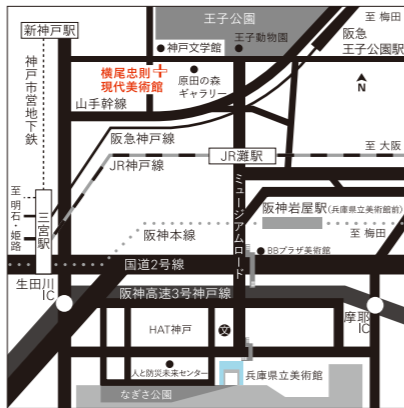
※兵庫県立美術館の特別展又はコレクション展の有料チケット半券ご提示で、当館の企画展を団体割引料金でご覧いただけます(詳細はHPなどでご確認ください)

編集後記

特集内でもご紹介しましたが、大公開制作劇場では5年半ぶりに横尾さんの公開制作が開催され、多くのお客様にお越しいただきました。

その他にもチンドンライブや大衆演劇(この模様は次号でお届け予定)など、展覧会に合わせた多彩なイベントが開催されています。

笑う横尾忠則展では「狂言」のイベントを開催!どうぞお楽しみに(尾崎)



Y+T MOCA

〒657-0837 兵庫県神戸市灘区原田通3-8-30
Tel: 078-855-5607(総合案内) Fax: 078-806-3888
www.ytmoca.jp

開館時間

10:00–18:00

(展覧会開催中の金・土曜日は

10:00–20:00)

※入場は閉館の30分前まで

休館日

月曜日(祝日の場合は翌日)

年末年始 メンテナンス休館



facebook
twitter

Y+Tメールマガジン登録

www.ytmoca.jp/news/index.html

横尾忠則現代美術館ニュース Vol.21

2019年5月23日発行

編集・発行:横尾忠則現代美術館

印刷:岡村印刷工業株式会社

the Y+T Times

横尾忠則現代美術館ニュース

Yokoo Tadanori Museum of Contemporary Art NEWS LETTER



Special Report 01 横尾忠則 大公開制作劇場 ~本日、美術館で事件を起こす 02 横尾忠則 公開制作

Column

「横尾忠則 西脇幻想」展 一光るまち・光る記憶—

Topics

最近の横尾さん

Event Report

01 歩くポップアート! チンドンが誘う美術の最高調

02 ワークショップ「オリジナル提灯をつくろう」

Editor's Choice

アーカイブルーム

Preview

人食いザメと金髪美女—笑う横尾忠則展

21

2019.5.23

Information

次回展関連イベント

兵庫県立美術館 展覧会スケジュール



Special Report 01

横尾忠則 大公開制作劇場

～本日、美術館で事件を起こす

世田谷美術館での公開制作作品（1986年）



各地の「Y字路」が勢揃い

本展は、横尾さんがこれまでに行ってきた「公開制作」に焦点を当てた展覧会です。画家転向後の1980年代から現在にいたるまで、横尾さんは様々な場所で公開制作を行ってきました。アトリエでの制作と違い、大勢の観客が見つめる中で絵を描くという状況を、横尾さんは演劇の舞台

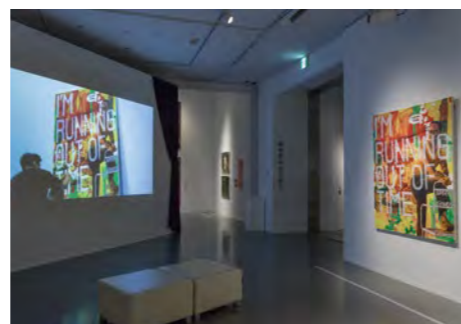
Yokoo Tadanori: Grand Theatre of Live Painting 横尾忠則 大公開制作劇場
Something's Happening at the Museum Today 本日、美術館で事件を起こす



横尾さんデザインの展覧会ポスター
モチーフは金沢21世紀美術館での公開制作作品（2009年）

にたとえています。「公開制作の現場には特殊な空気が流れている。観客の緊張感が逆に気持を解放してくれる。一種の演劇的空間だけれど、台本がない」(2011年7月1日付Twitter)。通常の演劇ならシナリオに沿って物語が進行しますが、公開制作はそうはいきません。あらかじめ決められた台本のない、即興劇のような公開制作は、何が起こるか分からない“事件性”を秘めた舞台であり、横尾さんの創作活動における活力剤でもありました。

横尾さんの公開制作は84年に始まり、その回数は本展開幕初日（2019年1月26日）の制作を含めて約30回にのぼります。本展では、それらの公開制作＝「事件」がいつ、どこで、どのように起こったのか、日記をはじめとする横尾さん自身の証言や、写真・映像などの記録資料から明らかにし、それらを演劇の上演になぞらえて、第一幕/幕間/第二幕と、時系列に3つのパートに分けて紹介しました。
第一幕<1984-86>では、横尾さんが公開制作を始めた80年代前半の活動を紹介します。81年のいわゆる「画家宣言」を経て、本格的に画家としてのキャリアをスタートさせた横尾さんですが、一方で当時、横尾さんは絵を描くために十分



当館での公開制作（2013年）。作品の上に文字が描き加えられました

なアトリエを持っていませんでした。制作できる場所を求めて渡り歩いていた横尾さんの前に、公開制作の機会が訪れます。当初は制作場所を確保するためにやむなく始めた公開制作でしたが、観客からの視線や熱気がプレッシャーとなり、かえって余計な自我が消えて自由に大胆に描ける、という実感を得た横尾さんは、その後も積極的に公開制作の機会を持つようになりました。70年代に傾倒していた精神世界から脱却し、絵画制作における肉体感覚に意識を向け始めていた横尾さんにとって、公開制作は自身の肉体性を取り戻すのに有効な作業であったのかもしれない。ボディ・ビルダーのリサ・ライオンを描いたシリーズや、森でのスード・パフォーマンス

を絵画化した一連の作品をはじめ、描かれた作品の多くには、画家の身振りを感ぜさせる荒々しい筆致が用いられています。画家宣言後の試行錯誤が窺える一方、混沌とした力強さや熱量も感じられる作品群です。
ところが80年代後半から90年代に入ると、横尾さんの公開制作は急激に減少していきます(幕間<1984-86>)。理由の一つに、当時の横尾さんの作品スタイルの変化が挙げられますが、とはいえ、横尾さんが公開制作に興味を失ってしまったわけではありません。この時期の横尾さんは、制作途上の作品を公開制作によって仕上げたり、公開制作で完成させた作品に再び手を加えることで、作品に思いがけない変化を引き起こしています。予定調和に陥りそうな局面を打開

するのに、“事件性”を秘めた公開制作は格好の手段でもあったのです。
2000年に横尾さんの代表的シリーズとなる「Y字路」が登場し、また横尾さんの個展が全国各地で開催されるようになると、以降の公開制作において「Y字路」は定番の主題として、各地の美術館で制作されるようになりました。それに伴い、それぞれの土地にちなんで“ご当地Y字路”も次々と生み出され、公開制作は最盛期を迎えます(第二幕<2004-12>)。さらに2008年からは、横尾さん自身が仮装して制作するPCPPP (Public Costume Play Performance Painting) が行われるようになり、道路工事の作業員や着服のコスチュームをまとった横尾さんが、絵の中に様々なY字路を建設していきました。それは



当館での公開制作で描かれた《N.P.》(2012年)
左側の四角い建物が美術館です

「絵を取り戻すためには画家が肉体労働者にならなければならない」(2019年1月29日付Twitter)という横尾さん自身の言葉とも響き合っているといえるでしょう。
「Y字路」が並ぶ会場では、ランダムに林立した仮設壁に公開制作時の記録映像を投影し、“事件”の現場を体感できる「劇場」のような空間構成をめざしました。……じつを言うと、ひとつ前に開催した「在庫一掃大放展」のレイアウトをそっくりそのまま再利用しているのですが、お気づきになりましたか？

林 優 | 本館学芸員



熊本市現代美術館での公開制作作品（2005年）。熊本にゆかりの芸能人が描かれています



Special Report 02

横尾忠則 公開制作

2019年1月26日(土) 10:30-11:15, 12:00-12:40, 14:00-14:40
当館オープスタジオ(1F)

「横尾忠則 大公開制作劇場」展の開幕初日、横尾さんによる公開制作が行われました。当館での公開制作は2013年7月以来、約5年半ぶりのことで、会場はみるみるうちに満員状態、立ち見の後を立たないほどの大盛況となりました。今回描かれることになったのは、「公開制作」をする横尾さん自身の姿。展覧会図録のカバーに用いられた熊本市現代美術館での公開制作(2005年)の写真がもとになっています。展示室内にイーゼルを立て、肖像画を描く横尾さんの後ろ姿が、ちょうどフェルメールの《絵画芸術》の構図に類似していることから、両者のイメージを重ね合わせて描かれることになりました。当日、開館直後から集まった観客の盛大な拍手に迎えられ、会場に姿を現した横尾さん。やや緊張した面持ちながら、ひとたび筆をとると、さらさらとスケッチをとってどんどん描き進め、1時間余りでキャンパスの余白がほぼ埋まってしまいました。さらに今回、予想外のサプライズが。元世田谷美術館の学芸員で、現在は落語家として活動中の高橋直裕(遊興亭福し満)さんが、制作の助手として駆けつけてくださったのです。



横尾さんと高橋直裕さん

エプロン姿で颯爽と会場に現れた高橋さんに横尾さんもびっくり! そのサポートのおかげもあり、約3時間の制作で150号の大作が出来上がりました。前日の記者会見で、「公開制作は航海地図のないま舟で漕ぎ出すようなもの。何が起るかわからない」と語っていた横尾さん。その言葉のとおり、描かれたと思うと塗り潰され、茶色から青へ、青から黒へと、短時間で次々に変化していくキャンパスに、観客の目は釘付けに。一方の横尾さんも、久しぶりの公開制作に新たな刺激を受けたようで、制作後、自身のTwitterを更新し、そこで「公開制作宣言」を発表しました。

長い間、公開制作を中断していたが、先週、神戸で久々に生き返った。体調はもうひとつだったが、公開制作はぼくにとってはエネルギーの点滴である。公開制作は人前で絵を描くことだ。絵はアトリエでひとり閉じこもって絵を描く従来の考えを批判することでもある。公開制作が絵を変え、生き方も変える。公開制作時は、頭はチンパンジー状態。肉体はアスリート状態。絵は肉体労働。絵を取り

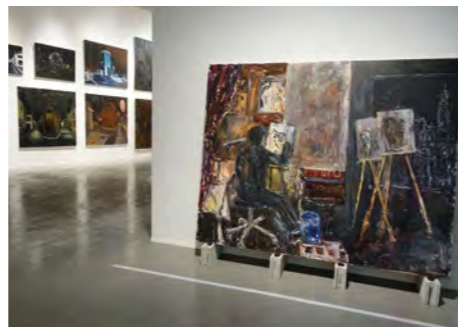


淡々と筆を走らせる横尾さん

戻すためには画家が肉体労働者にならなければならない。肉体労働の結果の絵を批評家はそこに精神を持ち込む。それでいい。公開制作は禅のように、頭を沈黙させる。雑念の去来を拒否する。アトリエを出て、公開制作の場に行こう。公開制作は画家をボージャクムジン(傍若無人)にさせる。宗教的修行などする必要はない。公開制作は禅堂である。アトリエの制作は画家を観念的にさせる。公開制作では画家を肉体そのものにさせる。絵は牢獄のようなアトリエで描くものではない。絵は公開制作という広場、又は舞台上で描くものだ。人の視線を受けて、人の視線をはじく。これが創造である。以上、公開制作宣言をする。(2019年1月29日付Twitter)

今後の展覧会でもまた公開制作に取り組みたい、と意欲を語った横尾さん。当館での次の開催をどうぞ楽しみに!

林 優 | 本館学芸員



制作された作品は会期中2F展示室にて展示

Topics 最近の横尾さん

新刊ラッシュ

昨年末に発行された『カルティエ そこに集いし者』(国書刊行会)は、カルティエ現代美術財団からの依頼で横尾さんが描いた世界各国のアーティストの肖像画133点を収録したオールカラーの豪華な画集です。

『知日』は日本をテーマとした中国のムック本です。その54号は、「一本全解! 横尾忠則」の文字どおり、一冊まるごと横尾忠則特集。中国でも横尾さんへの興味が高まっているようです。



「NIIZAWA 純米大吟醸 2018 横尾忠則」ラベル

「NIIZAWA Prize by ARTLOGUE」大賞受賞

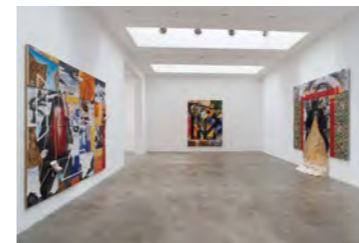
横尾さんの作品《女性と紳士靴》が最高級日本酒「NIIZAWA」2018年版のラベルになりました。これは株式会社アートログと新澤醸造店(宮城)の共同企画で、「NIIZAWA Prize by ARTLOGUE」によって優れた現代アーティストを顕彰し、受賞者提案のラベルを通して、日本酒という伝統文化と現代文化を世界へ発信するというもの。視覚と味覚が同時に刺激されそうです。

「奇想の系譜」展スペシャルヴィジュアルを制作

東京都美術館で開催された展覧会「奇想の系譜展 江戸絵画ミラクルワールド」のスペシャルヴィジュアルを横尾さんが担当。展覧会の元となった辻惟雄さんの著書『奇想の系譜』に刺激を受け、特に曾我蕭白への思い入れが強かった横尾さんならではの、遊び心あふれるイメージは、B0サイズのポスターとして商品化されました。当館の次回展「人食いザメと金髪美女一笑う横尾忠則展」ではこの原画を初公開。奇想の画家たちのモチーフを探しながら、ヨコオワールドを楽しんでみてください。

静岡市美術館にて講演会

金沢、高松と巡回した展覧会「起点としての80年代」の最終会場、静岡市美術館では、関連事業として、講演会「大逆転の時代、横尾忠則80年代を語る」が開催されました。聞き手は、1970年代より同時代の美術を見続けてきた美術評論家の谷新さん。1980年代初頭に画家に転向した横尾さんの絵画の歴史をスライドで辿りながら、当時の欧米の現代美術の潮流と日本の状況について確認しあう場となりました。「画家宣言」、ニューペインティングとの出会いなど、まさに1980年代を出発点とした横尾さんの証言をライブで聴ける貴重な機会とあって、定員の5倍となる500名もの応募があったそうです。

「パレルゴン:1980年代、90年代の日本の美術」展示風景
写真提供:BLUM & POE

ロサンゼルス展覧会に出品

ロサンゼルスギャラリー、BLUM & POEにて開催の「パレルゴン:1980年代、90年代の日本の美術」の第2期(4月6日~5月19日)に、横尾さんの作品6点が出品されています。フランシス・ピカビアやマルセル・デュシャンの肖像と作品を織り込んだ大作など、当館からも寄託作品3点を送り出しました。

東京で新作を一気に公開

「B29と原郷—幼年期からウォーホールまで」と題した個展が東京のスカイザバスハウスで開催されます。マッカーサーのような戦後の歴史上の、またはアンディ・ウォーホルのような文化的な著名人たちが題材になった人物画を中心に展示します。それらにいくつかの「Y字路」作品も組み合わせられ、横尾さんの戦中戦後の文化体験が回顧されます。5月31日から7月6日まで。

平林 恵 | 本館学芸員



『カルティエ そこに集いし者』(国書刊行会)



『知日』(中信出版社)



《奇想の系譜》2019年 | 作家蔵

「B29と原郷—幼年期からウォーホールまで」
Photo: Tomoki Imai

EVENT REPORT 01

歩くポップアート! チンドンが誘う美術の最高調

2018年11月17日(土)
出演:ちんどん通信社
パレード:13:30-14:30 | 水道筋商店街 ステージ・ショウ:15:00-15:30、18:00-18:30 | 当館オープンスタジオ



水道筋商店街パレードの途中で記念撮影

のですが、「ちんどん通信社」のパフォーマンスは一瞬にして周囲の視線を釘付けにし、ものすごい勢いでチラシがはけていきました。さすがプロフェッショナルです。

ステージ・ショウの第1部では、横尾さんの少年時代のちんどん芸の再現ということで、林幸治郎さんによる「人形振り」が披露されました。子どもをおんぶした浪人の立ち回りなのですが、実は背中の子どもが林さんで、浪人の頭は人形です。第2部では、子ども時代の横尾さんと「ちんどん屋」さんとの出会いのエピソードが、歌謡ショウ(皆さんの演奏能力もお見事!)を交えて紹介され、大盛り上がりの日となりました。

美術館をセール会場に見立てた「横尾忠則 在庫一掃大放出版」では、関連イベントに、なんと「ちんどん屋」さんが登場しました。大阪を拠点に活躍する「ちんどん通信社」です。彼らは熱心にリサーチを重ね、子ども時代の横尾さんと、通信社代表の林幸治郎さんとの意外な接点を探り当てました(前号"the Y+Times" Vol.20のSpecial Reportをご参照ください)。

イベントは水道筋商店街パレードと、美術館でのステージ・ショウ(2公演)から構成されています。まずは商店街の東端から当館まで約1.5キロの道のりを、イベントのチラシを撒きながら練り歩きました。学芸スタッフも「SALE」はっぴを着てお手伝いです。我々だけだと見向きもされないと思う



学芸スタッフもハッピを着てチラシ配りを手伝いました



林幸治郎さんの見事な人形振り

山本淳夫 | 本館館長補佐兼学芸課長

Column 「横尾忠則 西脇幻想」展 — 光るまち・光る記憶 —

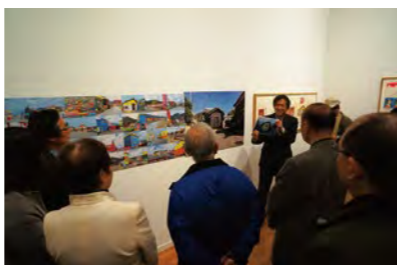
西脇市岡之山美術館 | 2019年1月6日-3月24日

西脇市岡之山美術館で、実に6年ぶりに横尾さんの個展が開催されました。横尾さんの記憶のなかの西脇と、西脇の今の姿とが時空を超えて交錯し、響き合うような展覧会です。なんと展示作品の半数以上が新作で、その多くが紙漉きカラーズの連作でした。西脇近郊の多可町にある杉原紙研究所で制作されたもので、手漉き和紙に播州織のラベルやハンガーなどのオブジェを漉き込んだ、実験的な作品です。

また、西脇の街並みの写真にCG彩色を施した作品も。仮想空間の中で西脇が鮮やかな色彩あふれる世界に変貌しているのですが、実はそれが現実になった場所があります。他でもない、横尾さんの最初のY字路作品のモチーフとなった、西脇市の椿坂にあるY字路です。いつの頃からか、地元の方々の手で、この場所がY字路誕生の地であることを示す看板類が設置されていたのですが、今回それらを含む建物全体が真っ黒に塗りこめられ、新たに立体作品《黒い光 その1》として生まれ変わりました。今後、横尾さんの生まれ故郷である西脇を訪問される際には、ぜひこの場所も訪れてみてください。



Y字路発祥の地は黒く塗りこめられ、立体作品《黒い光 その1》に生まれ変わりました



西脇の町並みをCG彩色した作品

山本淳夫 | 本館館長補佐兼学芸課長

EVENT REPORT 02

ワークショップ「オリジナル提灯をつくろう」

2018年10月20日(土)13:30-16:00
当館展示室、オープンスタジオ(1F)



作品を見る真剣な眼差し



カラフルな素材がいっぱい!



真っ白な提灯がどんどん色鮮やかに

ワークショップで使用された懐かしい素材たちも並びました。

まず最初に展示室で横尾さんの作品を鑑賞します。実は今回の展覧会は「光」を効果的に使った作品が多く展示されていました。そこで「ステキな光の作品を探しにいこう!」と探検のように展示室をまわっていきます。また、ワークショップ参加者だけの特典として、普段はみることのないテクナメーション作品《The End》(1994年)のライトをオンオフする瞬間をご覧いただきました。光が入ることで変化する作品の印象に皆さん興味津々の様子。提灯も光が灯る前と後では印象が大きく異なります。

作品から光の効果を学んだあとは、いよいよ提灯の制作に入っていきます。用意された沢山の素材の中から自分のイメージにあったものを選び、真っ白な提灯を自由にデコレーションしていきます。今回は「カラーフィルム」「和紙」「布」など様々な素材を用意しました。それぞれ光を入れたあとの透け方も異なってきますので、完成後の提灯を想像しながら素材を選びます。制作に入ると皆さんおしゃべりを忘れ、黙々と作業に集中。しばらくするとカラフルで個性豊かな提灯の完成です!

最後に、「点灯式」と称して天井に提灯を吊るし「3・2・1」のカウントダウンに合わせて照明を点灯しました。提灯に光が灯ると会場には思わず歓声が! 制作された提灯は展覧会会期中、1階のオープンスタジオに飾られ、訪れるお客様を華やかにお迎えしてくれました。



提灯が空間を彩ります

尾崎幸恵 | 本館学芸員補助

Editors' Choice アーカイブルーム

横尾さんに関する様々な資料を保管しているアーカイブルーム。その中で少なくない割合を占めているのが、横尾さんや横尾さんの作品などが掲載された雑誌、書籍、新聞などです。これらは武蔵野美術大学 美術館・図書館と共同で調査を進めています。

まずは横尾忠則現代美術館で簡易撮影による調査をした後、武蔵野美術大学 美術館・図書館で資料の題名や出版年、掲載内容など基本情報の入力と画像スキャンをします。美術館と図書館の複合施設である武蔵野美術大学 美術館・図書館は書籍整理について多くの経験とノウハウを持っていらっしゃる、当館にとって非常に心強い味方です。

また、当館での資料整理には武蔵野美術大学及び甲南大学の博物館実習生、神戸芸術工科大学インターンシップ生にも参加してもらいました。現在は、当館の検索システムだけでなく武蔵野美術大学 美術館・図書館でもデータ検索可能になるよう準備しているところですが、総数なんと約28000点! 刊行時期も1960年代頃から2000年以降まで幅広く、専門誌やフリーペーパーなどあまり目にする事ができないものも含まれます。時代時代の横尾さんの活動だけでなく、ゆくゆくは戦後文化史や異分野についても研究し得る資料群となることでしょう。



左 | ぎっしりと本が詰まった箱が数百箱も
右 | 「大公開制作劇場」展開催中は、アトリエや自宅など制作環境に関する掲載資料を展示しました

奥野雅子 | 本館学芸員補助